

A-5. 「ビオトープ作り」 もいわ幼稚園（北海道札幌市） <全園児>

園庭にビオトープを作り、日頃から子どもたちが、自然を身近なものとして感じ、池の生き物を発見したり、観察したりして小さな生き物の様子を知り、そして、命についても感じとることができるようにする。

昨年度の幼児の発想を受けての池づくりから発展し、ビオトープを作ることになった。ビオトープを作るにあたっては、専門家を招いて研修会を行ったり、池作りの考え方を話し合ったりした。その結果、できる限り自然な形での池作りということで、業者と相談の上、植物が生えてくるように防水シートを敷かず粘土で水留めをし、池を作ることにした。

<鳥が来る池を作ろう！>（5歳児）

年長児が園庭に鳥が来るようにと巣箱作りなどに取り組んでいた。幼児のその思いを受けて、鳥が水を飲みに来ることができるような池作りをしようと投げ掛けた。

知っている限りの知恵を出し合って池作りがスタートした。

「小鳥がゆっくり休める池を作ろう！」「穴を掘ろうよ！おっきいやつ！」「でも、穴に水を入れたら、水は地球の後ろまで染みてなくなるんだよ…」「そうだ！プールみたいにビニールシートを下に敷こう！」

穴を掘る姿は真剣。色が違う硬い石に当たると「ここは地球の始まりで、池の底なんだ！」と大発見。

土に水を掛け、「土は水に弱いから、掘る時に水を掛けると柔らかくなるよ。泥団子作るときにそうしたからね。」

穴が掘り終わり、シートを敷いて水を入れた。

「葉っぱ入れたら小鳥が餌と間違えてくるかもね！」

翌日から業者の工事が入った様子を見ながら、「園長先生、池の博士呼んでくれたんだ！俺達の池、すごい池になるぞ！」「ペンギン来たらどうする？」と、池の様子に興味をもっている姿が見られた。



<池の水汲み>（全園児）

池が完成したので、幼稚園の裏山（山の神様と呼んでいる）の雪溶け水（栄養の水）を入れることにした。雪溶け水から池までおよそ300メートル、バケツやペットボトルをそれぞれに持って水を運ぶことにした。

* 水を運びながらたくさんの会話が聞かれた。

- ・「みんなで運んだらすぐにいっぱいになると思うでしょ。なかなか溜まらないのは、地球の後ろ側まで水が染みているんじゃないだろうね」
- ・「みんなで頑張ってるからもうすぐだね。今ごろ、鳥も楽しみにしてるね」
- ・透明ペットボトルの中の水を見て「何かいるよ！虫かな～？ごみかな～？」「神様の水だからかな？」「ちょっと黄色いよね。おしっこじゃない？」「神様のおしっこ～！」「先生、山の神様の栄養の水は汚いね。でも池に入ると（粘土が溶けるため）もっと汚い水になるよ。これってすごい栄養なんだね」

* 何度も行き来するごとに、一緒に運ぶ仲間が加わったり、5歳児が3歳児をしっかりサポートしたりする姿が見られた。

* 3歳児は、水汲みは体力と興味の持続を考えて一往復だけと考えていたが、4・5歳児が繰り返し水汲みに出掛ける姿を見て、自分から何往復もする姿があった。「働いてるね～」と言いながら重さにめげず表情がとても生き生きしていた。普段の遊びとはちょっと違う活動であることを意識しつつ、幼児なりにこの活動が何か役立っていると感じ、そのことが心地よいものを感じられたのではないだろうか。



<鳥の餌を撒こう!> (5歳児)

教師 女児2名が池にパンをちぎって投げ入れているのを見て「なにしてるの?」

幼児 「鳥が来るように、池にパンを撒いているの。」池がパンだらけになる…。

教師 こんなにパンだらけになって、水が腐ってしまわないだろうか?と心配になったが、まだ池にかかり始めたばかり。これから、池についていろいろ考えたりして、池の水の状態にも気付いていこうと思う、「そうか、鳥が来てくれるといいね。」と見守る。

その直後、二人は大きな塊を池に投げ込む。教師は思わず「あっ!」と声が出る。その声に驚き、幼児は教師の方を見る。

教師 状況を考えた末、「大きなパンをこのまま入れるのはどうかな?パン沈んでいくかも…。」

幼児 パンの様子を見て「そうだねえ。鳥食べられない。でも、もう取れないよ。」

教師 木の棒でパンを手繰り寄せて取り、「どこか、大きなパンでも鳥が食べやすい所はないかな?」

幼児 「あ!ここ」と言って、隣の木の枝にパンを置く。

* 教師にとっては、虫やカエルがきてくれないかなあと思っての池作りだったが、5歳児にとっては、当初の思い通り「鳥を呼ぶ池」としての意義が強いようだ。鳥を呼ぶためにどうするのか、そこから池そのものの状態に気付き、いろいろなことを考えていこう。その経過を幼児とともに楽しんでいけたらと思った。

**<池にカエルを放そう> (3歳児)**

池の水汲み後、3歳児は自分から池を見に行く姿はなく、木の実を集めたり、畑の水やりを行う中で、池の様子を見て、「温泉みたいだね」「みんなで水入れたもんね～」と興味をもっている姿が見られていた。さらに自分から池に興味をもてかかわることができるように飼育しているカエルを池に放すことができないかと考え、幼児に投げ掛けてみた。

教師 「オタマジャクシさん大きくなったね。カエルになったら、今までと同じご飯は食べないんだって。外に飛んでいる小さい虫さんを食べるんだけど、何かいい考えはない?」

幼児 「虫さん捕まえてくればいいよ。チョウチョとか」

教師 「でもカエルさんはすごく小さいから、チョウチョはたべられないと思うなあ」

幼児 「じゃあ、川に逃がすか」

教師 「川ってどこの川?」

幼児 「幼稚園の川がいいんじゃない?」「幼稚園は、川じゃなくて池だよ」

教師 「じゃあ、幼稚園の池に逃がしてみようか」

翌日から、オタマジャクシからカエルになったものを見つけると、池につれて行き、放すようになる。放しながら、池の様子を見て、小さな生物を発見したり、捕まえたりする姿が見られるようになる。

<話し合いから>

- ・ 幼児と共に池の穴掘りや水汲みをしたことで、幼児の池に対する関心を高めていくことができたのではないかな。
- ・ 池の近くの餌台にある穴の開いたリンゴを見て、「僕たちが帰った後に鳥が来たんだね」と想像する幼児の姿があった。池があることで、空想の世界がより広がっていったのではないかな。
- ・ 3、4歳児は、オタマジャクシやカエルを放すなど、何か教師からの投げ掛けがあると興味をもつが、徐々に関心が薄れていく様子が見られる。教師が日頃から池の様子に関心をもって、幼児に伝えていくことで、幼児の興味が持続するのではないかな。

ポイント

子どもの発想を大切にしてピオトープを作ることを通して、子どもたちの思い、また経験や情報をもとに予測して行動する姿が見えます。その後、ムカデ・カエル・ワラジムシ・ミミズ、またボウフラが発生して力になったり、フキ・アシ・ヨモギ・ウド・クローバー・ハコベなどの植物が自然発生的に生えてきています。子どもたちは、こうした小さな生物や植物の成長や命を身近なものとして感じ、好奇心、探求心を膨らませています。